

# マカオ最大の魅力は世界遺産の散策

## ポルトガル時代の数多くの教会が点在 安全・安心なデスティネーション



マカオのシンボル、聖ポール天主堂跡。1602年から1640年にかけて建設。建設には中国人のほか、長崎から徳川幕府の弾圧を逃れてきた多くの日本人キリスト教徒も加わったという。1835年の火事で現在の正面壁のみ残ったが、それでも圧倒的な存在感を誇る。



聖コセフ修道院と聖堂。イエズス会アジア布教のため建立。

マカオの世界遺産の最大の見どころは、ポルトガル植民地時代の教会にあるのではない。欧州や南米を旅すると、カテドラルをはじめとして威圧するような教会が多い。とくに、中南米の教会は、「征服」を象徴する存在としての印象を強く受けるが、バステルカラーに彩られ、こじんまりとしたマカオの教会は、歴史に思いを馳せながらの散策に適している。

例えば、聖ローレンス教会は、1560年の創建時は木造で、現在の石造建物は1803年



聖ローレンス教会。回りには椰子の木。

とくに、滞在日数を増やし、モノデスティネーションとして確立していく可能性は高いと感じた。

もう一つ、観光客が自由に散策しながら、安心して旅するデスティネーションは、残念ながら世界中にそう多くはない。マカオはそうした数少ない安心できる安全なデスティネーションの一つである。この点は、もっと強調しても良いのではないと思う。

とくに、マカオをモノデスティネーションとして考えた場合、熟年層を対象としたクオリティの高い旅行商品を作成する一方で、FITや自由度の高い旅行商品のニーズはさらに高まると予想される。その時、マカオの安全性は他のデスティネーションと比較して、大きなアドバンテージになるのではないかと。

また、マカオを代表する世界遺産の一つに媽閣廟(マアコμμィウ)がある。カッコ内の発音が「マカオ」の由来という。航海の女神「阿媽(アマ)」を祀ったマカオ最古の中国寺院で、「阿媽」は中国南部や台湾



マカオの地名の起源とされる媽閣廟(マアコμμィウ)

などで広く信仰されている。正門、中国式鳥居、4つのお堂から構成され、一つの寺院に異なる神々が祀られる中国文化の代表例として評価されている。

媽閣廟は海岸沿いにあり、その前の石畳の広場は市民の憩いの場となっている。ここからは広東省珠海市を臨むことができる。



コタイ地域の景色は、埋め立て再開発で様変わりした。

## 東西の歴史と人々の日常が共存する街

マカオ観光の最大の魅力は、世界文化遺産「マカオ歴史市街地区」にある。マカオは西洋と東洋が出会い、450年以上にわたり東西文化が融合・共存した地として、2005年7月に世界文化遺産に登録された。「マカオ歴史市街地区」は、22の歴史的



セナド広場。石畳(カルサーダス)も世界遺産。

建築物と8カ所の広場で構成されている。世界文化遺産となった「マカオ歴史市街地区」の特徴は、普通にマカオ市民が暮らす、言わば「日常生活地域」に歴史的な建物が点在していることにある。

街角や路地裏では人々が会話し、公園に行けば人々が安らぎ、昔の日本の下町のような情景の中に、世界遺産が点在しているといった印象を受ける。



聖ドミニコ教会

マカオ観光局は世界遺産を効率的に歩くためのウォーキングマップと音声ガイドを用意している。どちらもマカオ観光局のウェブサイトからダウンロードできる。このウォーキングマップを片手に、音声ガイドを自分のオーディオプレーヤーで聞きながら、マカオの街を歩けば、マカオの歴史・文化を深く知ることができ、旅の楽しさが倍増する。

マカオの歴史市街地区を散歩する上で、最初のスタート地点となるのが「セナド広場」だ。セナド広場自体が世界遺産であり、市民、観光客が歩く波形模様の石畳も世界遺産。その回りを民政総署、仁慈堂、カテドラル、聖ドミニコ教会などの世界遺産が取り囲む。

マカオの世界遺産のシンボルは、やはり聖ポール天主堂跡だろう。見る者を圧倒する存在感があり、今は、教会の前面に当たる石造りのファサード(正面壁)が残るが、完成当時は「ローマより東でもっとも傑出した教会」と言われていたという。



聖アントニオ教会。マカオのキリスト教布教発祥の地。

聖ポール天主堂跡は小高い丘にあり、ここまで登ると、マカオ半島の街並みが一望できる。したがって、観光客だけでなく、マカオ市民の憩いの場にもなっている。スタート地点のセナド広場と聖ポール天主堂跡を繋ぐ道「大三巴街」は、土産物屋がひしめき、観光地に来たことを実感させるが、一歩路地を曲がれば、日常の静けさに戻る。

聖ポール天主堂跡の近くには、モンテの砦と中央大砲台がある。17世紀初頭にイエズス会の修道士によって築かれた要塞で、オランダとの戦いで街を守ったという。ここからマカオ半島の眺めは絶景で、要塞としては絶好の位置にあることが分かる。

聖ポール天主堂跡から少し足を伸ばすとカモンエス公園がある。公園の名前となった16世紀のポルトガルの詩人、ルイス・デ・カモンエスは、数年間をマカオで過ごし、「ここに地果て、海始まる」の一節で有名な代表作「ウス・ルジアダス」を執筆したと言われている。



マカオ市民が憩うカモンエス公園とカモンエスの像(左)

公園のシンボルとされる噴水の奥に、ひっそりとカモンエスの胸像が置かれている。カモンエス公園は、子供が水浴びしたり、老人が中国将棋を指していたり、合唱をしていたりとマカオ市民の憩いの場となっており、ここまで来ると観光客はそれほど多くなく、観光客を全く意識しないマカオ市民の素顔を見ることが出来る。

に建てられた。新古典様式の建築で、中国産のタイルを使用した屋根やターコイズブルーの天井が特徴。建物の規模や数回にわたる修復から、この周辺は裕福な地域であったことがうかがえる。

聖コセフ修道院と聖堂は1728年の創設。このイエズス会の教会は、1758年にバロック様式で建てられた。日本の歴史にも登場し、日本人に馴染みの深い聖フランシスコ・ザビエルの右上腕骨の一部が納められている。

これらの教会を散策していると、時折、日本人旅行者を見掛ける。女性2人、母娘、女性1人と形態は様々だが、聞いてみると、世界遺産が想像以上のものだったという答えが共通して返ってきた。



聖オーガスティン教会

教会というと、前述の大きな威圧感のある教会を連想するが、マカオのような教会群はマカオ独特のものなのだろう。散策するのに最も適しており、異口同音に散策する時間が足りず、「もう一度来たい」と述べていた。

旅行者の中には、マカオと香港、さらには深センなどと組み合わせたいと語る人もいた。次回はマカオだけで訪ねてみたいと語る人もいた。

日本人の観光目的として、マカオの世界遺産は浸透してきているが、実際に旅行者に聞くと、ポテンシャルはまだまだあり、

## タイパ、コロアン地区も独自の魅力

### コタイ地区にメガリゾート開発



官也街

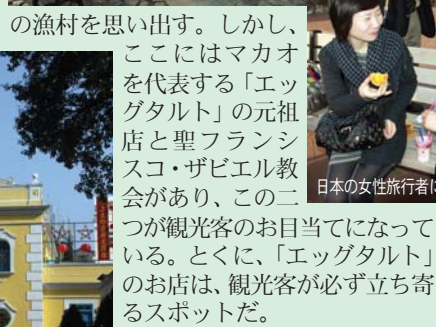
マカオ特別行政区を構成するのは、世界遺産のあるマカオ半島と、その南のタイパ島、コロアン島、両島の間を埋め立てた開発地区のコタイの4地域。タイパ島はかつては漁村だった地域で、中心街周辺は、今やマカオのグルメ通りとして有名な「官也街」。この街の両側に中国・ポルトガル・マカオ・タイ料理などのレストランや、カフェ、中国の伝統的なクッキーやスナック菓子、漢方薬、雑貨を売る店などが並んでいる。

また、タイパはかつてはポルトガル人の別荘があった地域で、今は「タイパ・ハウス・ミュージアム」として、バステルカラーの建物が並んでいる。

その先のコロアン島は、タイパ島よりもさらに漁村らしい漁村で、どこか日本の島



ポルトガル人の別荘地だったタイパ・ハウス・ミュージアム



聖フランシスコ・ザビエル教会

ここに「アジアのラスベガス」とも謳うべきカジノ&リゾートホテルがオープンし、今

も建設中の地域である。世界同時不況の影響で、メガリゾート建設が延期されているものもあるが、マカオ政府はコタイ地域をアジアのビジネス・ツーリズムの中心として計画的に開発を許可しており、コタイ地域のメガリゾートがその受け皿となることは想像が付く。

しかし、日本人観光客の場合、ラスベガスを見ても分かるように、カジノでは旅行者を拡大することは難しいのではないかと。MICE需要にはカジノ、ショー、ショッピングセンターのメガリゾートは有用かもしれないが、エンタテインメント性は個人旅行需要にはプロモーション次第ではマイナス面も出てくる。

マカオ観光の魅力は、やはり「歩いて見る」ということに尽きるかもしれない。とにかく自分の足で、数時間歩けば、多くの世界遺産に接することができる。しかも、その界限には市民もいれば、観光客もいて、一歩路地に入れば、観光客も少なく、日常的に風景に身を置くことができる。マカオの魅力はその歴史・文化・食事・人情などを全て包み込んだ日常を散策することにある。



日本の女性旅行者にも人気のエッグタルト